

「天災は忘れた頃にやってくる」

表題の言葉は、20 世紀初頭に活躍した物理学者の寺田 寅彦 (1878 - 1935) 先生の有名な言葉です。寺田先生は、1923 年の関東大震災後、災害研究に関心を深め、原因の究明や防災対策について言及しています。その後、日本の社会が戦災や経済復興に力を注ぐようになり、災害研究そのものは 1959 年の伊勢湾台風以降、気象災害を除き下火になってしまった感がありました。しかし、その後 1995 年の阪神淡路大震災と、2011 年の東日本大震災を契機に、急速に災害研究を標榜する研究者が多くの分野に渡って増え研究分析や蓄積が進んで行きました。

私たちにとっては、今年度から高等学校で始まった新しい必修科目「地理総合」で、GIS を活用した災害研究が 3 つのテーマの一つに取り上げられていることは大いに意味があります。地理学を教える者としては、実にほぼ 50 年ぶりの必修科目としての「地理」の復活を喜ぶ一方で、全国的には大学で地理学を学んだ教員の不足や 20 ～ 50 歳の若い世代の地理学習やフィールドワーク経験の不足が悩みです。ただ本校では私を含め 3 人の地理専門の教員がおり、安定的で最新の授業を提供していますのでご安心ください。これまでの 20 数年に及ぶ私の多摩大聖ヶ丘での教員生活を通して地理学研究や国際理解教育の魅力を生徒たちに伝えて来ました。お陰で大学・大学院で地理学や国際関係学などを専攻する卒業生は確実に増え、筑波大学、東京都立大学、慶應義塾大学、上智大学、明治大学、國學院大學など多くの卒業生が同じ道を志してくれたことは教師冥利の一つと言えるでしょう。

ただ、私が 2 つ目の修士論文として「桜島火山地域の研究」を行っていた 1970 年代後半は、アメリカ合衆国において行動科学を中心に災害研究が注目され始めたばかりで、国内では災害研究をする研究者もそれほど多くはありませんでした。そこで、所属指導教官の許可を得て、月に数回、東急電鉄東横線沿線にあった東京都立大学まで通い、災害について研究する数少ない院生たちに

加えてもらい一緒に学習させてもらったことは大いに良い刺激になりました。

今日では、地理学に限らず社会学や防災科学、災害心理学という新しい研究部門が多くの大学に設置されるようになったことは嬉しい限りです。特に、21 世紀前半に予想される南海トラフ巨大地震などの国家的な危機を乗り越えるために、防災科学技術研究所法の成立により「防災科学技術を向上させることで災害に強い社会を実現する」という基本理念に基づき防災科学技術研究所が設立(つくば市)されました。さらには、「いのちとくらしをまもる防災減災」を一人ひとりが実行していくために、国土交通省では防災ポータルを立ち上げ、各関係機関等の防災情報提供ツールを行っています。また、国土交通省国土地理院では、これまで自治体ごとに作成されていた情報を 1 つにまとめ、洪水・土砂災害・高潮・津波のリスク情報、道路防災情報、土地の特徴・成り立ちなどを閲覧し、地図や写真に自由に重ねることのできるようになっています。

東北大学では、3.11 での経験を踏まえて大災害を二度と繰り返さないというミッションから 6 つの部門・2 つのセンターを持つ災害科学国際研究所(IRIDeS)を 2012 年 4 月に発足させています。ここでは他学部と兼任ながらも、実践的な災害対策・減災研究に力を注いでいます。他大学の若い学生にも研究所教員の指導を受けながら学ぶことのできる制度も整備されています。一方、自然災害鑑定士という民間資格もでき、災害の発生メカニズムや被害を未然に防ぎ、復興に役立つ人材の育成が図られるようになっています。

本校でも、生徒たちが「自ら災害行動が実践できるようにする」こと使命として、2021 年に生徒会の組織を改組して災害対策委員会を立ち上げ、さまざまな取り組みを行っています。同時に、ご家庭でも、具体的な避難時の連絡方法について話し合う機会を設けておいてください。

【参考図書】

寺田 寅彦(1934) 『天災と国防』講談社学術文庫に再録(無料のインターネット電子図書館「青空文庫」でも閲覧可能)

校長 石飛 一吉